

「スロイス方聚」スロイスの調剤処方箋

著者	板垣 英治
雑誌名	北陸医史
巻	34
ページ	18-25
発行年	2012-02-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/30304

「スロイス方聚」スロイスの調剤処方箋

金沢市 板垣英治

スロイス (P. A. J. Sluys) は金沢医学館で明治五年に、
 薬剤学に続き薬剤の調剤処方箋の講義をしていた。その講
 義録として「スロイス方聚」と「スロイス薬剤録」が現存
 している(1・2)。両者の関係については何も記述されて
 いないが、薬剤処方数は前者が後者より少ないことから方
 聚を先に講義したものと見られる。当時の西洋医学におい
 て医師が処方した薬剤は主に生薬であり、これに僅かであ
 るが有機酸や無機酸および塩類が含まれていた。スロイス
 の講義録の生薬名の翻訳と記述は、漢字の用例から文政五
 年(1822)に宇田川榛齋(玄真)著の『遠西医方名物考』
 の記述を基に行っていた(3)。

処方箋は医師が患者を診察して、どのような判断(診断)を
 行い、その結果に基づいて対応した治療薬が与えられるこ
 とから、明治初期の医師の診断を示す重要な情報源である。
 江戸中期から我が国には長崎にボンベ、シーボルトらが渡
 来して、西洋医学の教育と患者の治療を行なった。彼らが教
 えた薬剤の資料も現存している。

「スロイス方聚」の薬剤の処方箋には適用した疾患名が
 僅かしか記載されていない。そのために、処方中使用され
 た薬剤の薬効を「スロイス薬剤学」講義録(4)、太田雄
 寧纂述『薬物学大意』(一、二)(明治十一年六月刊)(5)等
 を用いて解説して適応症を推定した。本稿では、「スロイス
 方聚」に記載された処方箋の一部分を使用した薬剤名とそ
 の量および適用症を紹介する。この結果から明治初期の西
 洋医学において実際に行われた医師による患者の診療の様
 子を振り返って見る。

本文末には本稿で記載した各薬剤の簡単な解説を記した。

1、「スロイス方聚」に記載された処方の分類

本資料に記載された処方を分類すると次の様になる。

呼吸器疾患剤	煎剤	7種、水剤6種、散剤15種
消化器疾患剤	煎剤	24種、水剤10種、散剤24種
肝臓薬剤(黄疸)	散剤	1種、血液・貧血薬剤 3種
点眼剤	12種、含嗽剤	17種、点耳剤9種、点鼻剤 2種
駆虫剤	3種、皮膚科薬剤	1種、神経精神科薬剤 4種
泌尿器疾患剤	12種、その他	1種
膏藥	11種、灌腸剤	11種、塗擦剤(外敷を含む) 22種
注射薬	6種	

この分類結果によると、消化器疾患のための薬剤、特に煎劑、水劑、散劑が多く教えられていたことが分かる。消化器疾患用の処方使用された薬剤名とその効用を表1に示した。生薬の植物の学名はスロイス薬剤学(4)に記載されたものを引用した。

緩和劑としてサレーツプ、依蘭苔、健胃苦味劑として健知亜那、泥菖根、加密兒列、橙皮舍利別、緩下劑として刺答尼亜、センナ、玉林度、下劑として大黃、催吐劑として吐根、鉛糖などが使用されていた。

表1、消化器疾患の用例としての処方。

煎 藥

- 1、沙列布 一刃、刺字達(ラウダ) 六滴、薄荷油 一滴、温湯 八オンス、 毎時一食匕宛
- 2、健知亜那エキス 一刃、赤幾那皮 二莖、 水煎 四オンス、 毎時一食匕宛
- 3、泥菖根 半オンス、塩酸アンモニウム 一刃、水煎 八オンス、 毎二時一食匕宛。 胃腸衰弱
- 4、依蘭苔 半オンス、亜括 十二オンス、 放冷後飲用 慢性下痢、痢疾
- 5、吐酒石 一グレイン、亜括十オンス、朝夕一食匕、 催吐劑

水煎は沸騰水、亜括は水である。

丸 藥

- 1、乳酸鉄 二莖、健知亜那エキス 適宜、六十丸とし、 一日三回 一粒宛
- 2、泥菖根 一莖、タラキサキウムエキス 適量、 六十丸として、 一日二回三粒宛
- 3、醋酸酸化鉛 六グレイン、阿片 二グレイン、 芦根エキス適宜、十二丸として、 一日三回一粒宛 水劑

1、粥汁 八オンス、稀硫酸 一莖、橙皮舍利別 一オンス、 慢性腸炎に用いる

- 2、吐酒石 一グレイン、亜括 十オンス 右調合し、毎朝夕、一食匕宛、 催吐劑
- 3、薄荷水 半莖、薄荷油 半莖、硫酸麻屈涅失亜 一オンス、水 六オンス、右溶化し、一日大約三オンス宛 消化器疾患に適用

4、大黃水製チンキ 一莖、亜括 二オンス、 健胃、 緩下劑

次に、硫酸規尼捏(硫酸キニーネ)がしばしば使用されていた事を示す処方を表2に示した、硫酸キニーネが鎮痛劑、鎮靜劑として、広範に使用されていた。さらに表3に呼吸器疾患のための処方例をしめした。

表 3、呼吸器疾患のための処方例

煎 劑

1、沙列布 半均、刺宇達 八滴、白糖 半オンス、

熱湯 六オンス、 毎半時一食匕宛、

結核勞末期の下痢に宜し

2、麦奴 半匁、温湯 六オンス、

毎時一食匕宛、 結核勞末期の下痢に宜し

3、依蘭苔煎 八オンス、錯酸亜模尼亜 半匁、民埤里

精、模爾比 尼捏 半匁、

毎時一食匕宛、 肺結核

4、接骨木花 一オンス、民埤里精 六匁、泡出 八

オンス 毎半時一食匕宛、

気管支力タル、水腫、祛痰

丸 劑

5、帝列並底那 二匁、阿片越幾斯 十グレイン、萬苳

越幾斯 半匁、思篤末 適宜、羯布兒 十グレイン、

六十丸として、一日三次一丸宛、

慢性気管支炎衝、吐膿、肺結核

6、醋酸酸化鉛 十グレイン、阿片 三グレイン、

思篤エキス 適量、 二十丸として、一日四次、

表 2. 硫酸キニーネを使用した水剤の処方

水 剤 の 部			
硫 酸 規 尼 捏 12 g	稀硫酸 10 滴	老利児水 1 匁 蒸留水 半 o	リュウマチス、 神経痛
硫 酸 規 尼 捏 6 g	稀硫酸 4 滴	水 4 o	尿道狭窄 フージー施術ノ后、頓服
硫 酸 規 尼 捏 1 勺	稀硫酸 10 滴	白糖 半 匁 亜括 6 o	萎黄病 greensickness, 貧血病、歇傳私埤里
硫 酸 規 尼 捏 1 匁	稀硫酸 半 匁	老利児水 1 o 亜括 4 o	右調勺 1 日 3 次 1 小食匕宛、心臓肥大症
硫 酸 規 尼 捏 4 g	蜂蜜 1 o		右調勺 朝午夕 1 卵匕宛、嬰兒 間歇熱に宜し
硫 酸 規 尼 1 勺	橙皮舍利 1 o	稀硫酸 1 勺 亜括 8 o	右毎 2 字 1 食匕 2 日量なり。 胃 衝
規尼捏 12 g	稀硫酸 6 滴	橙皮舍利別 1 o	右混合 毎字 1 食匕宛
硫酸規尼捏 20 g	亜括 4 o	稀硫酸 20 滴	右毎字に 1 食匕あて、 喘息
硫酸規尼捏 10 g	沃陳鉄 私篤魯布	2 勺 亜括 4 o	?
g = グ레인、 o = オンス、 勺 = ?			

一粒宛、

肺膿瘍、肺疾患

7、格魯屈私麻爾扶斯 一莖、硫酸規尼捏 十グレイン、

甘草膏

適宜、六十丸として、一日三次、二粒宛、気管支炎

水 剤

8、米飯 八十オンス、老利児水 一莖、アセタス模爾

比捏 八分一グレイン、護謨亜護尼亞幾 半莖、

右調勺每半字一食匕宛、肝油 兼用、規那鉄丸、

呼吸器炎症

9、魯兵利亜印布羅多丁幾 一莖、刺宇達 半莖、甘硝

石精 二莖、健知亜那丁幾 一莖、右調勺一日三

回 十滴宛

喘息

呼吸器用処方方の散剤の部では金硫黄および吐根が盛んに使用されていた(表4)。金硫黄と吐根は少量により粘液物質の排除を促す働きがあるから使用されたと考えられる。

次にサントニン、セメンを用いた駆虫剤の処方及び遺精・

血尿剤を示す。

駆虫剤

1、珊篤尼捏 四一五グレイン、セメン末 一匁、四包

として、毎時一包を服用した、駆虫剤

但し服后リチ子油(ヒマシ油 一オンス)を服用

した。

表4. 金硫黄と吐根を使用した呼吸器疾患薬の処方

醋酸模爾比捏	半g	金硫黄	4・6g	白糖	1莖	2包、1日4次1包宛、咳嗽に偉効あり
依百加粉古亜那	1匁	白糖	1莖			10包、1日3次1包宛、咳嗽(5才以上) 12包、1日3次1包宛。
菲沃期エキス	4g	金硫黄	6g	白糖	2莖	
アセタスモルヒ子	半g					
菲沃期エキス	4g	金硫黄	4g	白糖	半莖	10包 1日5次1包宛 気管支疾患
		吐根末	10g			
依百加粉古亜那	6g	菲沃期エキス	2g	白糖	1莖	20包、毎2時1包宛。呼吸器疾患、 broncho coferehae
依百加粉古亜那	1匁	金硫黄		白糖	2莖	12包、1日3次1包宛。 慢性気管支 嚢に宜ろし。
醋酸模爾比捏	1g					
醋酸模爾比捏		單寧捏	6g	白糖	12g	24包、1日3次1包宛。 Tuberulae palmoniam, Heamaptae. 或菲沃期エキス6gを加入す
吐酒石	半莖	吐根末	20g	白糖	1g	20包、1日4次1包宛。呼吸器疾患、 男脊椎彎側ノ者 咳嗽吐痰ニ宜シ

2、撰綿末 一匁、單尼捏寧 四グレイン、四包とする

朝八時より毎時一包服用、回虫驅虫剤

3、珊篤尼捏 三グレイン、撰綿末 半匁、三包とする。

每三字一包宛服用、

驅虫剤

遺精、血尿剤

1、單尼寧 半匁、思篤末 二匁、三十包、一日五次一包宛、
血尿に効あり。

2、格綸屈斯癡爾秩斯 半匁、リュピリ子 半匁、羯布
児 十五グレイン、三十包、一日三回一包宛。

遺精に効あり。

3、羯布児 三グレイン、麝香 四グレイン、曾依屈児 一匁、
六包として、毎二時一包宛服用。遺精に効あり、
羯布児 (カンファ) が処方されていた。

次に眼科と皮膚科の処方を示す。

眼科の部

1、甘汞 六グレイン、刺巴爾 二匁、六包として四回一包宛
眼球焮衝二宜シ

眼の洗浄・消毒に甘汞が使用されていた。

皮膚科の部

1、硫黄華 一グレイン、酒石英 一グレイン、一日一

次、一卵ヒ宛、皮膚病、座瘡

或 一日三次一卵ヒ、乾癬、脂漏症に効あり。

硫黄華による皮膚の炎症部の治療が行われていた。

本稿に記載された薬剤の簡単な解説。

沙列布 (サーレプ) Salep, *Orchis mascula* の根

滋養緩和剤

健知亜那 (ゲンチアナ) エキス、チンキ、根 *Gentiana lutea* の根、
苦味・健胃剤、チンキ、エキス・水剤

泥菖根 (デিশョウコン) *Acorus calamus* (菖蒲) の根、

胃腸衰弱に使用

薄荷水、薄荷油 (ハッカ) *Mentha arvensis* L. の精油、
メントール、清涼剤、腸管気腫などに効あり

依蘭苔 (エイランタイ) *Cetraria islandica* Arch. (つめ
のきこけ科)、緩和剤

吐酒石 (トシュセキ) 酒石酸カリウム・アンチモニウム塩、
催吐剤

乳酸鉄 鉄製剤、健胃、貧血、胃痛に効あり。

酢酸酸化鉛、鉛糖 慢性下痢

タラキサキウムエキス タンポポの根のエキス、苦味剤

芦根エキス イネ科 *Gramineae* のアシ *Phragmites*

communis TRIN. の根茎を乾燥したもの、または新鮮な

もの、胃薬として用いられる

老利爾水、老利兒水 *Laurus nobilis* 月桂樹、精留液

を使用。

痙攣性咳嗽、赤痢、胃腸の神経痛、尿器衰弱
沃陳私篤魯布 ヨードチンキシロップ

麦奴(エルホチネ) *Claviceps purpurea* の産する ergot,

アルカロイド、催生剤、肺出血に収斂止血剤として使用

錯酸亜模尼亞 酢酸アンモニア塩

民埵里精 (ミンドレリ) 酢酸アンモニア、水溶液として

使用。

発汗、祛痰の効がある

接骨木花 *Sambicum nigra* ニワトコの花、実、花は

発汗の効あり。

リュウマチ、眼焮衝、皮膚羅斯に使用

萬苜越幾斯 (チサエキス) *Lactuca sativa* の乳液、

鎮痛、痙攣剤、疼痛性焮衝の鎮痛、痙攣緩和、利尿

帝列並底那(テレピンチネ)テレピン油、*Pinus bryx* の

精油、シルベン酸、タンニン、苦味質、便秘、腸

管氣腫 など

格魯屈私麻爾扶斯(コロクシマルフス) *Colocyntidus*

コロシント、サイトルウリユス、コロシンチュス?、

緩下剤 便秘、水腫

思篤末

刺字達

アセタス模爾比捏 酢酸モルヒネ、*papaver*

somniferum よりのモルヒネの酢酸塩、溶解性を増し

た塩類、鎮静、鎮痛

護謨亜謨尼亞幾 ゴムアンモニア

魯兵利亞丁幾(ロベリアチンキ) *Lobelia inflata* の葉の

乾燥物を酒精で浸出液、祛痰剤、喘息、百日咳等を使用

魯兵利亞印布羅多丁幾 同上

甘硝石精 Sweet spirits of Nitre, spiritus nitrico

aethereus, 亜硝酸エチルと酒精の混合物、利尿剤、

血管拡張剤

菲沃期(ヒヨス)エキス *Hyoscinus niger* の葉、種の

アルカロイド、ヒヨスアミン、痙攣の鎮静、麻醉作用。

喘息、咳嗽剤、瞳孔散大に使用

金硫黃 Sulphidum stibicum, 硫化マンチモン

発汗、利尿作用あり。リュウマチス、百日咳、喘息など

依百加粉古亜那(イペカコアナ)吐根(トコン) *Cephaelis*

typacuanha (アカネ科)イペカクナ、催吐剤エメチン

を含む、胃腸衰弱

單寧捏 タンニン 収斂剤

刺答尼亜(ラトウニア)エキス、チンキ *Kramerias*

franchia Raiz & Par. の根、エキス、チンキとして

収斂剤として、慢性下痢に使用

珊篤尼捏 サントニン 駆虫剤

セメン末、攝綿末 攝綿施那 ベルー産の亜爾鮮の種類の
花苞 駆虫剤として使用

羯布兒(カンフル) *Laurus camphora* の葉、根の精留物、

樟腦、利尿、生殖器、尿器機能の鎮靜

麝香 麝香鹿の精囊腺より分泌物、ムスコンを含む

鎮痙、神經衝動作用あり、

曾依屈爾 (ソイクル) *sulter* (蘭) = *sugar*

甘味剤として藥劑に添加

水煎 沸騰水、亜括 阿克ア 水

藥量の單位

a、一刃 (スクルベル) 20 グレイン = 1・3グラム

b、一オンス 約 32グラム

c、一錢 (ドイム) 60 グレイン 3・9グラム

d、一グレイン (grain) 64・8ミリグラム

まとめ

スロイスが講義した「方聚」(医薬品の処方箋)を藤本
純吉の筆記した講義録より紹介した。本方聚では各疾患用
の藥劑処方合計 151種、および軟膏、灌腸劑、注射藥な

ど 50種の例が挙げられていた。

呼吸器、消化器、肝臟、循環器、耳鼻咽喉器、泌尿器、
精神神經等の広範な領域に渡っていたことも注目される。

一方、講義された処方箋の特徴は藥用成分を含む植物・
動物類を多く使用していることである。まだ、それぞれの
材料から分離された藥用成分の使用は始まっていなかった。
これは伝統的な処方方に依っていたからと見られる。それで
も、チンキ、エキス、精油、として使用したものは、材料
からの分離の始まりでもあった。モルヒネが酢酸塩、硫酸
塩で使用され、キニーネが硫酸キニーネとして使用されて
いたことも注目される。鎮痛劑としてキニーネ、阿片、モ
ルヒネを使用した処方が常用されていたことも特徴的であ
る。喘息藥として「甘硝石精」を使用した処方があったこ
とは注目される。本藥劑に関しては別稿に詳しく記載した
(6)。

無機化合物及び無機塩類として、硫黃華、硫酸マグネシ
ウム、甘汞、硫化アンチモニウム(金硫黃)、乳酸鉄、酢
酸アンモニア、酢酸鉛、酒石酸カリウム・アンチモニウム
(吐酒石)等が使用されていた。

スロイスの「藥劑録」については、次回に紹介する予定
である。

文 献

- 1、スロイス方聚、藤本純吉筆記、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
- 2、スロイス薬剂録、藤本純吉筆記、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
- 3、宇田川榛齋、遠西医方名物考、石川県立図書館蔵。
- 4、スロイス薬剂学、藤本純吉筆記、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵、板垣英治、北陸医史、第33号、36―48、平成23年。
- 5、大田雄寧、薬物学大意、明治11年、国会図書館蔵。
- 6、板垣英治、北陸医史、第34号、18―25、平成24年。